

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 12 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884067

研究課題名(和文)日本近代文学における座談会の文学・批評的意義

研究課題名(英文)A critical meaning of symposiums in literary magazines in Japanese modern literature

## 研究代表者

酒井 浩介 (SAKAI, KOHSUKE)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：60710556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本近代の雑誌メディアにおける座談会記事の流通と、それが文学・批評においてどのような役割を果たしたかを調査した。戦前、昭和初期の誌上座談会を資料として収集し、小林秀雄らが関わった『文学界』に代表されるこの時期の文芸座談会の批評的な役割の分析が主な目的だったが、それを明らかにするために傍証として必要な資料の収集に難航した。また、体調を崩したこともあり、まとまった形として発表できなかった。話し言葉として半ば放言することがこの時期の批評に、その言葉の責任に二重性を付与していたことについて今後、改めて発表する機会を持てればと思っている。

研究成果の概要(英文)：This studies was that investigation of symposiums in literary magazines in Japanese modern times. Main purpose is a definition of critical meanings of symposiums as known as "Zadankai" in Japanese. I collected the magazines that contains symposiums before the World War II. For example, "Bungakukai" that is well known as the most popular critical and literary magazine that published by Kobayashi Hideo. But, I have a problem with collection of data. And I fall sick. Therefore, I couldn't published a thesis. I think that spoken languages as a symposium play a role of ambivalent responsibility for criticism in Japanese modern literature. I hope the opportunity that published my studies in a few days.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近代文学 座談会 批評 話し言葉 対話 合評 小林秀雄 文学界

### 1. 研究開始当初の背景

日本の雑誌文化にみられる市場座談会はしばしば日本特有の現象と評される。座談会自体は必ずしも文学に限った現象ではないが、その成立過程をたどると雑誌『新潮』合評会(1923)から『文藝春秋』座談会(1927)の座談会まで、文学者が主導することで普及したことが確認されている。

一方で座談会は近代文学において著者の書き言葉ではないがゆえにそれらと同等におかれず軽視されてきた現状がある。本研究以前に座談会自体が書かれた特殊な話し言葉として近代文学の特に批評の系譜の中に位置づけられるという論文を発表していた。また、そこでは座談会文化の根付いた日本社会や、つぶやきや落書きが声として表彰される現代インターネット社会の分析も視野に入れていた。

### 2. 研究の目的

誌上座談会がなぜその時代に文学者を中心とした需要を持ち、広がっていったのかの調査を目的としている。それは座談会というメディアの特質と、この時代が必要としていた文学性・批評性の両面から成り立っている。

具体的には座談会の成立した大正～昭和初期の座談会とそこに参加した文学者たちの批評的な立ち位置の分析を目的としている。座談会の分析は複数人による話し言葉の集積であるため、その会話がなされた時代背景、文学者個人の書き言葉でなされた主張との比較、掲載された雑誌メディアの特色などの多方面にわたってコンテクストを確認する。

### 3. 研究の方法

座談会を掲載していた代表的な文芸誌ほか文学者が参加している座談会の資料を収集する。代表的な雑誌として『新潮』『文芸春秋』『文学界』『新演芸』『歌舞伎』『婦女界』『婦人公論』『女人藝術』などがある。また座談会に参加している代表的な作家として、森鷗外、小山内薫、久米正雄、菊池寛、佐藤春夫、小林秀雄らがいる。

また必ずしも文学的でないとされていたり、もしくは文学的に周縁に位置していたりする資料を収集し、文学雑誌における座談会に見られる現象が文学特有の問題なのかまたはそうではないのか、その比較を通して分析する必要がある。

そうして収集した資料の中から特に重要と思われる座談会を選別し、それがなされた時代背景や文学的意義を抽出する。座談会の文学や批評的な分析はそれ単独では成立しない。話し言葉として会話の中で語られた言葉の質と各作家たちが書き言葉として発表した言葉の質との差異を考察する必要がある。

また重要な座談会の選別のためにバランスが偏らないように配慮する必要がある。

時代的な背景として小林秀雄に代表される批評の成立と密接な関係にあると考えられるため、同時期の批評的な文脈の参照が必要になる。また、饒舌体を始めとする語り手が前景化してくる話し言葉的な文体を持つ小説への影響が考えられ、文体的な分析を行う。

方法論として話し言葉と書き言葉の差異を読み解いていく理論的な枠組みを必要とする。デリダなどの話し言葉と書き言葉をめぐる考察やメディア論などを広く参照する必要がある。

### 4. 研究成果

#### (1) 大正期以前の座談会状況

「三人冗語」など座談会的な要素を含んでいるが必ずしも座談会とは言えない合評が多く確認されている。それらが後年の座談会と異なるのはそれが座談会と呼ばれていなかったことと、それ以上に会話をそのまま記録していないことである。

話し言葉がそのまま記録されていないため、文体が固く、一人あたりの発話は長く、会話としての軽妙さが無い。会話の場合、論旨につじつまが合わないということが起きるが、そうした書き言葉としての合評ではそうした混乱が起きにくい。

しかし、その一方で多くの意見を一堂に集める読み物が構成されたという点で、後の座談会を生んだ需要の萌芽も見られる。特に演芸雑誌の劇評に多く合評が見られることは、異なる意見が求められていたと同時に、演劇自体が持っている話し言葉的なパフォーマンスとの親近性があったと考えられる。

大正期以前はまだ言文一致的にも書き言葉自体が完全に成立していない時代であり、書き言葉と話し言葉の区分け自体が混沌としている。

#### (2) 大正期の合評会流行

1923年に雑誌『新潮』が小説合評を座談会形式で行ったことにより、文芸各紙で合評会が行われるようになっていく。また婦人雑誌など必ずしも文学的でない雑誌にも文学者が駆り出されて合評会などが企画されている。

この時期もまだ座談会という言葉は定着していないが、それが後の座談会のルーツとして確認されること、また速記を用いてほぼ逐語的に記録されたことにより、会話形式を模した座談会形式がほぼ完成したと見られる。

主に小説合評という形で行われたこれらの合評会は参加者同士の発話をそのまま記録するために多くかみ合わず、紛糾したままになっていることが多い。またその後記憶違いや記録ミスなどが指摘され、座談会での発言が発端となって新たに問題が提起されるようになった。

久米正雄のように座談会があるごとに各

雑誌に引っ張りだこになる作家も現れている。この時期に文学者が経済的に成功を収め、また社会的なスタートして認知されるようになった現象とも軌を一にしている。文学に必ずしもとどまらない雑誌メディア的な現象として捉えることが可能である。

### (3) 昭和初期の状況

昭和初期になると『文藝春秋』が初めて「座談会」と銘打ち、名実ともに座談会が定着することになる。この時期になると座談会は文学的な現象を超えて幅広いテーマで行われるようになり、『文藝春秋』などの座談会がそれを代表する。

また、様々な種類の座談会が催されるようになり、例えば『女人藝術』では女性だけを集めて座談会を行うなどの試みがなされている。

座談会の定着と多様化の一方で文学的には小林秀雄の登場などにより、それまで小説などの文学に対して従属的なものと見られていた批評にスポットライトが当たるようになる。小林秀雄が「様々な意匠」と揶揄した社会主義や実験的な小説論が席卷したのもこの時代の特徴である。

この時代において座談会は立場を同じくする者たちによる意見を読みやすくするためのプロパガンダとして行われ、また立場を異にする者たちによる意見対立を示すためのものとして催された。

特に小林秀雄は自らが雑誌『文学界』を主宰するようになると毎号のように座談会を行い、また転向の時代になって行き場をなくした左翼的な作家たちを自分の雑誌に吸収した。座談会はそうした『文学界』グループの作家たちの意見交換の場として機能し、また小林秀雄は様々な論争をする一方でドストエフスキー論を並行し、そこに対話的な要素を見出している。

こうした状況下において戦争期に入ると『文学界』は「近代の超克」と銘打った座談会を行い、欧州の知的協力会議を模して戦争の意味づけと必要性についての議論を行っている。この座談会に対する評価はファシズムに対する最後の抵抗だったと見る見解と、結果的にファシズムに与してしまったという見解とに分かれており、いずれにせよあまり評価は高くない。

しかし、その政治的イデオロギーばかりが取り沙汰される一方でなぜこれが座談会として行われなければならなかったのかということと、それに対する同時代の書き言葉があまりに乏しかったということはいまだに看過されている。政治的なイデオロギーよりも話し言葉が持っていた可能性をくみ出せなかったことこそがこの座談会の失敗であると本研究は結論する。

### (4) 総括

戦前、昭和初期の誌上座談会を資料として

収集し、小林秀雄らが関わった『文学界』に代表されるこの時期の文芸座談会の批評的な役割の分析が主な目的だったが、それを明らかにするために傍証として必要な資料の収集に難航した。また、体調を崩したこともあり、まとまった形として発表できなかった。話し言葉として半ば放言することがこの時期の批評に、その言葉の責任に二重性を付与していたことについて今後、改めて発表する機会を持てればと思っている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

酒井 浩介 (SAKAI, Kohsuke)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手  
研究者番号：60710556

#### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：